
ハードボイルドに格好よく

智恵子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハードボイルドに格好よく

【Nコード】

N0862D

【作者名】

智恵子

【あらすじ】

暴力団抗争をハードボイルドな男、勝^{しょう}と、おかまの遥^{はるか}と医学生で泥棒の勇次が面白おかしく活躍して抗争をのりきるコメディ

プロローグ

この美しい神戸の夜景の中に、不穏な二人の男がさまよっていた。それはやけに汗ばむ、熱い夏の夜だった。

「高野組組長が、本当に平山組の親父さんを狙つとるんだろっか？」

「ああ、間違いないみたいやで。平山組本家に爆弾仕掛けたそうや」

二人の男は、チンピラ風の衣服と下品な面立ちで、繁華街の路地裏を歩いていた。

「そうかもしれんなあ。平山組組長が六代目に就任されたときの反目やしな。せやけど、平山組は日本最大の暴力団やで？ たかが系列組織の高野組なんかが喧嘩を売るかなあ」

「俺の聞いた話ではなあ、高野組には福山組が後ろに付いてるらしいわ」

「え！あの関東一の福山組かいな！」

「ああ、関西進出を狙つとるらしい」

「なんやと！じゃあ、わしらが高野のおやつさん殺つたら福山組との抗争が始まるんか？」

「ああ、どうせ今の時代に抗争なんて言つても、形だけや。結局上の方で手打ちして、しまいやろ。でもな、もし高野のおやつさん殺つてしもたら、わしらの小指をだすか、何かして手打ちやるなあ」

間抜けな男達だった。こんな男達の小指一本で抗争が終了するなら、そんなめでたい話はない。

「わし、やつぱり止めたくなってきたわ」

「何言つてんねん。ここで逃げたら、わしら極道界の笑い者や。それどころか、わしらの親父さんに殺されるわ。わしら下っ端が上に行くには、根性みせなあかん。最近は頭のええ奴が上に登るから

のう。阿呆は阿呆なりに根性でのしあがらなあかんのじゃ」

くだらない話をしながら、二人の男は話題に拳がっていた高野組組長、高野真治暗殺に向かっていった。

それは、日本最大の暴力団組織平山組の本拠地神戸で始まる、高野組反逆事件の平山組から初めて仕掛ける攻撃だった。もちろん、こんな情けない会話を交わす二人が、暗殺に成功するはずもなく、平山組六代目組長北原元蔵は怒りの絶頂を向かえていた。

失敗した二人の親分である平山組幹部高知義男は、北原の平山組事務所に呼ばれ、頭を垂れていた。

「お前は何を考えるとんじゃ。ん？何とか言ってみい」

「親父さん、すみません。もう一度、わしにチャンスを与えて下さい」

「お前の組は銭儲けやしたら、まあ使えるけど、他のことはあかんのう。やくざは力じゃ！もうお前は去ね。銭儲けでもしとらんか」

ひれ伏す幹部に北原は大声を出して、警護の者と呼んだ。

「おい、誰か！勝　を呼べ！早く来るようにな」

そして物語は北原組長の怒りと共に始まるのだった。

少し汗ばむ昼下がりの午後。少し潮の香りを含んだ風が流れるが、不快な気分にはならない。そんな風が流れる中に、お洒落な店が並んでいる。ここは神戸の中心部である三宮である。平日だというのに、買い物客以外に、露出度の高い洋服を着て歩く女や、それを目当てに来る男たちで街は賑わっていた。

「彼女、美人だね。ショッピング中かなあ？」

栗色の髪を軽くかき上げながら、軽薄そうな声を発した青年が、一人の美女に声をかけた。

「ねえねえ、少しくらいこっちを向いてくれないんじゃない？こんな美男子は滅多にお目にかかれないよ？」

自分の口から美男子と言うだけあって、まわりの女の子も振り返る程、かなり整った顔とスリムな体躯の持ち主だった。ＴシャツとＧパン姿で、これ程爽やかに自分を魅せる男は、そうそうお目にかかることは出来ないだろう。

しかし、女もそうそうお目にかかれないほどの綺麗な女だった。夏だと言うのに透き通るような肌が目に焼き付くようだが、それ以上目を引く漆黒の瞳。印象的で大きな瞳は、少し冷めた雰囲気で気品を漂わせている。そして真っ白なワンピースを風になびかせ、颯爽と歩く。

「ありやりや、完璧に無視はないじゃない。ここまで無視されるとちよっぴり恥ずかしくなっちゃうだろ？」

戯けた姿でさえ様になる男を余所に、黙々と歩き続ける美女は、肩まで伸びた黒髪を真っ白な手ですかした。

「私に話しかけないで」

可憐な鈴の音というより、夏の風に揺られる風鈴のような声を、彼女は男を見ることなく発した。

しかし、自分の姿を見ようが見まいが関係ないように、男は話し

かけるのである。

「わお！綺麗な声だねえ。俺、松浦勇次っていうんだ。君なら勇次って呼んでいいよ」

「…あなたねえ」

勇次は振り向いて文句を言いかけた彼女に、再び自分の名を言った。

「勇次だつて！」

女はあきれ果た溜息を一つ吐き、再び歩き始めた。

「ねえ、君はなんて言う名前なの？」

「…」

「歳は？あ、俺は二三歳だけどさ…まあ歳なんて関係ない。愛さえあれば…」

何気なく隣を歩く勇次に、女は迷惑そうに口を開いた。

「何か用事でもあるんですか？」

「うん、大切な用事！君と一緒にお茶を飲もうと思ってさ！」

女は勇次の勝手ないい草に、呆れた瞳と共に声を出した。

「あのねえ…言いたくなかったけれど、私はやくざの娘なの。さ

あこれで、お茶なんて気分じゃ無くなったでしょう」

どこか悲しい瞳で女は言い切った。そして、勇次に背を向け歩き出そうとしたとき、勇次は女に駆け寄り、作りものとは思えない爽やかな笑顔を見せて言った。

「そんなの俺には関係ないし、君がやくざと言うわけでもないもん。だから、お茶を飲もうよ」

そう言つて女の腕を掴み、強引に近くの喫茶店に入った。半分犯罪ではないだろうか…端で見ていた人はそう思っただろう。しかし、端の人は唯の通行人であり、そんな人の思惑など勇次は気にも止めることはなかった。

事は勇次の思つがままに進んで行く。

「そうか、由美子ちゃんって言ふんだ。名前も綺麗だね」

勇次の言葉に、クスクス笑いながら、由美子は初めて穏やかな表

情を見せた。

「あなたたつて変わってるわね。私は一応なりとも年上なのに、由美子ちゃんだなんて…」

まっすぐ伸びた髪を片手でかき上げて、勇次の瞳をまっすぐに見た。

「俺にとつては可愛い女の子には変わりはない！こう見えても一応医大生だし、知的で大人で優しくて申し分ないだからね」

「本当に、面白いわね。私はもう二五歳になるのだけれど、一五年前にあなたみたいな人に会ったわ。あなたほどこしゃべる人ではなかったけれど…」

少し遠い瞳をして、由美子は話し始めた。

「小さい頃から、やくざの娘って苛められてたの。そのうち苛めるんじゃなくて、怖がられて…無視されててね。そんな時、今のあなたと同じ事を言ったクラスメイトがいたの。やくざの娘なんて関係ないってね。その人だけよ、私の友達と呼ばたのは…。同じクラスの子でね。仲良くなったと思ったら転校しちゃって…それ以来二人目ね」

由美子は手元にあつた紅茶を飲み干し、席を立った。

「楽しかったわ、ありがとう」

チャリンと小銭をテーブルに置いて喫茶店から出ようとした。

「あ、待って」

勇次の言葉に振り向きもせず、店を出て行く由美子を勇次は追いかけて…たかった。だが現実には、勇次は勘定を済ませなければならぬ。

「あー。いい。いい。釣りいらないから」

釣りが必要かどうかも解らないが、ポケットにあつた小銭を投げるように支払い、足早に去ろうとする由美子を追いかけた。

「何で逃げるのさ」

人通りの少なくなつた路地で、白く細い腕を掴み、勇次は由美子の足を止めた。

「もう用事は済んだでしょ？私、あまり知り合いを作りたくないの。もう、悲しい思いをしたくないもの。抗争が始まったり、何かあると誰かが傷ついたたり、離れて行くのよ？それならいっそ、友達とか知り合いなんかいない方がいいじゃない！」

涙が溢れそうで、由美子はうつむき加減に叫んだ。

「じゃあ、彼氏になつてあげようか！」

由美子は不安な顔を上げて、不思議そうに勇次を見つめていた。

「では、さっそくデートに直行！」

慌てふためく由美子の腕を、しっかりと握りしめた勇次は勢いよく歩き始めた。

由美子の悲しみが、勇次にはわかっていた。勇次は親もなく、一人で生きてきた過去を持つ者だからだった。親戚にはたらい回しにされ、通う学校で盗難が続くと、真っ先に疑いを持たれ、友は離れる。何か良くないことがあると、すぐ金に困ってお前がやっただろうと、見下される。由美子とは違うが、同じ仲間を持たずに生きていた者だったからだ。

今だって、親がいるわけでもない。捨てた親：勇次にとって、親が子を捨てたのではなく、子供である自分が親を捨てたのだ。捨てた親は勇次にとって、先ほどの通行人と同じである。人生の中で、すれ違っただけの人なのだ。そんな親の為に、自分が卑屈になることはない。と、勇次は考える。

由美子ちゃんも、こんなに綺麗んだから：親なんて関係ないよな。んー俺が幸せにしてあげなきゃね。

と、他にも思惑を馳せる勇次だった。

由美子と勇次がデートを楽しんでいる頃、重い空気が流れる平山組事務所の裏口から、二人の男が入ろうとしていた。

「ねえ、勝ちちゃん」

天使が人間に化けている錯覚を抱いてしまう様な美貌の持ち主が、スーパームodelにしては目つきの鋭い男に声をかけた。

「なんで、表から入らないのさ。勝ちちゃんは平山組系の親分衆なんかより、よつぽど凄いいし、かつこいいのに」

話しかけた内容はさて置き、男とは思えない程、色素の薄い容姿をしている。刈り上げたうなじに軽く波打つ髪がかかり、妙に色っぽい。男とは思えない容姿で透き通るような声であるから、性別が殆ど不明に近かった。風が吹けば倒れるような華奢な男の体に、低い声が返った。

「お前がいるからだろう！お前が俺のおやつさんをたぶらかして…」

「人聞き悪いなあ。私が悪い訳じゃないよ？元ちゃんが勝手に私に惚れただけだもん。」

「元ちゃんは止せと言ってるだろう！誰であろうと北原元蔵をそんな風に呼ぶのは俺が許さない」

「勝ちちゃんって元ちゃんの事好きよね。もつと私の方を向いてくれないかしら？あんなおじさんより、私の方が綺麗だし可愛いし…。もちろん勝ちちゃんのことを誰よりも愛してるしさ…。やっぱり美貌…。永遠に聞いていても心地良い声だが、勝にとっては耐え難い内容のようだった。

しかるべき所で止めなくては、自分の拳が理性を突き破って、目の前の小悪魔を殴りそうになる。

「はるか…もういい、黙って歩いてくれ…」

一人の男は懸命に理性で暴力的行為を抑え、そしてはるかと呼ばれた綺麗な男は、少しの不満を呟きながら組長室についた。

組長室の前の側近が、素晴らしく良い体躯の男の方を見つけ、挨拶をした。

「これは山崎さん、組長がお待ちかねでしたよ…と、はるかさんもご一緒でしたか…」

「なによ、私が一緒だと何か困るわけ？」

「いえ、そんなことは…」

「はつきり言ってやれ。お前が来ると、組

長が、むぬけ…」

さすがに組長をふぬけ呼ばわりすることの出来ない勝は、一瞬口ごもった。

「組長が…組長で無くなってしまうし…そう、姉さんに申し訳ないとな」

そう言いながら勝は組長室のドアをノックした。

「勝か」

「はい、お呼びと聞きましたので…」

北原から入室の指示があり、勝はドアノブを回した。

洗礼された家具と置物、茶色を基調とした落ちついた室内の中には威厳のある声と風格。さすが日本一の暴力団組織の頂点に立っている男だと思わせる。

その室内に勝が一步踏みだし、即座にドアを閉めた。

「ただいま参りました」

勝の挨拶が始まるや否、甲高い声がドアの外から聞こえた。

「ひつどーい、勝ちゃんの馬鹿！私から逃げるつもりでしょう！」

「そ、その声は、はるかか！」

ああ、またこの人の病気が始まってしまったのか。いくら刑務所時代に男の味を知ったからと言って、何故こんなはるかのことなんか…。

勝の嘆きとは裏腹に、北原とはるかは対面を果たした。

「おお、はるか。会いたかったぞ。儂も色々忙しくてな」

「うん、なんか忙しそうだね、元蔵さん」

「なんだ、儂とお前の間柄じゃ、いつものように元ちゃんと呼んで欲しいもんだ」

はるかの仕事しを予想した勝は苦い顔をした。

「だってね、勝ちゃんが元ちゃんって呼んじゃ駄目って言うんだもん」

「勝！」

「はい、よけいな事を申しました。ご容赦下さい」

素晴らしく整った顔と体躯を持って、勝は北原に即座に謝罪した。だが、はるかが仕掛けた仕返しは、北原の説教となつて勝を襲うのである。

「いいか、勝。はるかは僕にとって宝なんじゃ。心のオアシスだ。お前は、どうもはるかを良く思つたらんようだが、僕とはるかの間を邪魔するのだけは許さんぞ」

「だから、ご容赦下さいと言っているじゃありませんか」

なんだつてこの俺が、こんなお釜のために頭を下げなきゃならないんだ！

少しうんざりした様子で勝は言ったが、北原の説教はまだ続いていた。

「なんだ、その言い方は！お前をここまで育てたのは誰だ。大学を出て射撃の腕を上げ、男として磨きを掛けたのはこの僕じゃ」
勝は永遠に続きそうな説教を勝は聞いていたが、仕方なくはるかを見た。

「まあいいじゃない元ちゃん。せっかく会えたのに元ちゃん怒つてばかり。なにか勝ちゃんに用事があつたんでしょう？私はそれに付いてきただけなんだから」

はるかの声が入り、北原の口はなんとか動きを止めた。

「…はるかがそう言うなら、この事は無かつたことにしよう。まあいい、本題に入ろう。はるかがいるならなおのことだ」

そう言つて北原は落ちつきを取り戻し、革張りのソファに腰を下ろした。

「まあ、座るがよい」

北原の言葉で勝が対面のソファに腰を下ろしたとき、得意顔のはるかが隣りに座ろうとした。

「はるかはこっちに座るじやろう。勝の前だからって遠慮することはない」

「私は勝ちちゃんの横がいいの！」

「ゴホン、で、話とは何でしょうか」

嫌な方向に話が再び進もうとしたところを、勝の言葉で本筋に戻した。

「ああ、そうじゃったな。高野が裏切ったんじゃ。僕の私邸に爆弾なんぞを仕掛けおつてな。思い出しても腹が立つ。まあ何事もなかったが…。そこで、高知の奴に任したところ…あいつは役にたたん男じゃ」

年輪のある顔をさらに深めて、北原は話し続けた。

「まあいい、高野組のことだ。他の奴に任せようと思っておるが、心配なのははるかなんじゃ」

「なんではるかになるんだ？こんな奴、ギャグのネタにしかならんが…」

「いいか勝。高野は僕の弱点を知っておる。はるかだ。余り知られておらんが、高野は前の代替わりの時に僕を調べたことがあつてな。知つとるんだ」

「ちようどいいじゃないか、こんな奴なんかいなくなってしまうえば俺の邪魔者もいなくなる。はるかをおとりに使えば…そうだ、それがいい。」

「そこで、今もはるかの身を守っている勝に気をつけてほしいんじゃ」

「それは、気をつけていますとも。親父さんの大切な人ですから…」

「そう、たとえこんな奴でもだ！そうじゃなけりゃあ、こんな奴の側に寄るかっていうんだ。」

「そうか、それは安心した。勝が本腰を入れてはるかを守ってくれるなら大丈夫だろう」

北原は話が終えたかのように、葉巻に火をつけた。

はるかは一応静かに座っている。

北原は一向に話し出す気配もない。

しかし、勝は待っていた。北原からの話の本題を…。

しかし、しかした。北原は話し出すどころか、はるかとかくだらな

話を始めた。

「はるかはいつ見ても綺麗じゃのう。どうだ、こんどゴルフでも一緒に回らんか」

「はるかねえ、ラスベガス行きたいなあ。前から行きたいと思ってたの。もちろん勝ちちゃんも一緒よ！」

「そうか、ラスベガスか！良いのう良いのう」

「あの、親父さん…」

しびれを切らした勝は、北原に話しかけた。

「あの、話というのははるかのボディガードの件だけですか？」

「そうだが…？」

「この高野組との抗争を、裏には福山組がいるかも知れない、こんな時に…はるかのことだけ…？」

「なにを言っておる。はるかが一番大切じゃて！一番重要なことだぞ！心してはるかを守れ！良いな」

なんだって、親父さんはこんな奴をここまで…。全く涙が出そうだ…。

納得しないまま勝は事務所を出た。

車には乗ったが、荒っぽい運転になるため、勝は近くの公園に車を止めた。

町中にある、綺麗な公園に綺麗な男と、そして男…。

「くそ、何だってこんな奴の子守なんだ！」

「私はとつてもラッキー！今日からずっと側にいてね、勝ちちゃん…」

怒るな、怒るな。相手は唯の馬鹿じゃないか。そう唯のお釜だ。そう、おかま…おかま…なんで俺の…クールでハードボイルドな生き方の中に、こんなおかまが…。

「ねえ、勝ちちゃん。これから仕事なんだ！」

まだ日の高い時間である。妙に晴れ渡った空が、勝の機嫌を更に悪くした。

「それで、何が言いたいんだ」

「もちろん側にいてね」

爽やかな風がながれるのも、木々がざわめくのも腹が立った。

「休め。休んだって金に困る訳じゃないだろう」

「そんなこともないよ。勝ちちゃんったら、あんな家賃の高いところに住むんだもん」

「そりゃ、誰にも干渉されたくないからな！高級クラブを買い取って、わざわざ改装したんだ！それなのに…」

「もう、勝ちちゃんのおかげで、家賃は一〇〇万も払わされてんのよ」

「お前が横に引つ越してくるからだろうが！」

怒るな…怒鳴るな…そうだ、俺はクールなハードボイルドなんだ…

「…、家賃が一〇〇万だとしても、親父さんからの生活費に比べれば微々たるものだ。いいか、仕事は休め」

「だめよ！綺麗でいるためには仕事しなくちゃ！人に見られることが私を綺麗にするんだから」

「お前の仕事場に俺が行けるか！お前の職場はなんだ！」

「高級ゲーボーイクラブ『ドール』」

「ふん、ゲーボーイクラブに高級も低級もあるか！スケベなはげ親父と、お釜にこびり付いたオコゲの女のたまり場じゃないか！俺が！この俺が何でいかなきゃならないんだ！」

「じゃあさ、仕事に行かなくても綺麗になる方法があるんだ！それを勝ちちゃんが手伝ってくれるのなら仕事は行かないよ」

「なんだ。言っていみる」

そう言った、勝は嫌な予感がした。次の瞬間、予想は的中し悪寒となつて勝に帰ってきた。

はるかが勝の腕に、そつと腕をからみつけたのだ。

「私の好きな人が…私を抱いてくれることよ、…勝ちちゃん」

勝の体に鳥肌が一瞬にして広がった。

「はるか！仕事に行くぞ！」

「あーん、待つて。まだ仕事には早いよお。ちよつと買い物してから行こうよお」

ああ、男を売るチャンスなのに、親父さんを守りたいのに…
なんだって、なんだってこんな奴の子守なんだ！

1（後書き）

つづきます。

ご意見・感想おまちしています。

「じつは俺さ、泥棒さんなんだ！」

由美子と勇次は三宮商店街を歩き回っていた。夕暮れが近づき、空を赤く染め始めた。

「勇次君って面白いわね」

いつしか自然に笑うようになった由美子は、夕日を浴びて更に美しくなった。

「本当だよ。だから君の心も盗めるんだ」

妙に真剣な勇次がおかしくて、由美子はクスクスと笑っていた。そんな二人をはるかが見つけた。

「ねえ、勝ちちゃん。勇ちゃんだ」

「あんな奴がいたって、俺は全然嬉しくない。勇次も、俺の干渉されない生活を踏みにじるお前同様、嫌な奴だ」

そう、勇次もだ。泥棒か医学生か知らないが、俺の横に引越したんかしやがった野郎だ。ああ、思い出したくもないのに……

「けっこう綺麗な女と歩いてる……」

はるか言葉に勝の心は動き、瞳がはるかと同じ方向を向いた。

「何？なんで俺がお前みたいな奴で、勇次があんな美女なんだ！なんか間違っていないか？」

「私の方が美人だよ！」

「美人ってのは女のことだ」

「そんな！男女差別だ！美しい人のことを美人って言うの！」

「お前みたいに男のくせに、女のような振る舞いしてる奴が……美しいって言えるのか？」

「ひつどーい。勝ちちゃんを思う気持ちは、真珠のように美しく、汚れないこの思い！なんで？美しい心と体じゃない！」

こうして意味のない言い合いを、人混みの中で始めてしまった。

「あれ？勝さんとはるかちゃんだ……なにをこんな人混みの中で目

立ってんだらう?」

「知り合い?」

「ううん、何でもなし。さあ由美子ちゃん、変な奴等はほっといて、お酒でも飲みに行こう!」

遠くから見ていた勇次が、逃げるように歩き出した。

「ねえ、ちよつとまって。勇次君」

由美子は早足で歩く勇次に話しかけた。

「さっきの人…山崎…山崎勝って名前じゃない?」

「…知ってる人?」

「さっき話した昔のクラスメートかも…」

由美子は気になって、さっきの場所に戻ろうと言い出したが、いきなり二人の間に乱暴な三人の男たちが現れた。

「高野組長の娘さんだな」

柄の悪いチンピラが二人。高野組組長の暗殺を失敗した高知の手下共だった。

「お嬢さんには恨みは無いんやけど…ちよつと儂らと一緒に来てくれんかのう」

「なに吉本新喜劇の台本みたいなこと言ってるだよ、おっさんたち。ここに格好のいい色男がいるのにさ。由美子ちゃんがおっさんたち不細工についていく訳がないだらう」

勇次の口を止めようと、由美子はチンピラの前に立ちはだかった。

「何ですか、あなた達は」

「高知組のもんや。あんたの親父さんは、儂らを裏切ってなあ。

恨むんやったら親父さん恨めよ」

チンピラ達が由美子の腕を掴もうとした瞬間、勇次の蹴りがチンピラの腕に炸裂した。

「こら、おっさん。由美子ちゃんに汚い手で触ろうとすんなよな。汚れるだろ」

ただ、ポケットの中に手をつ突っ込んで、立っただけの勇次にやられたチンピラは激怒した。

「何さらすんじゃ、ぼけえ。儂らの後ろには平山組がおんねんど！ええ！それでもそんな態度取れるんかい！」

勇次はあきれ返った目で、チンピラ共を見下した。

「ああ…これだから不細工な人たちは可哀想で…。男前はな、なあんも後ろ立てなくても格好良く生きていけるのに…それすら知らないんだねえ」

「勇次君、むやみに挑発するのは止めなさい！」

由美子が止めた瞬間、チンピラ達が勇次に襲いかかった。

「不細工がいくら束になっても、スーパーハンサム君には勝てない！」

冗談を言いながら、まず一人を蹴り倒した。勇次の余りに機敏な動きに、後の二人は慎重になり身構えた。

「ほほう、やっと俺様のすごさを知ったかい？これでもまだやる？」

危機を悟った筈のチンピラ達の方が、勇次の不敵な笑みをかき消すかのように、にやりと笑った。

「へへへ、こりゃあすげえ。良かったぜ、用心してよ」

チンピラの一人が話し終わったとき、由美子の悲鳴が聞こえた。

「ちつ、仲間いたのか」

勇次が振り返ったとき、由美子は男二人に連れ去られようとしていた。

「くっそ、女の子を手荒に扱うなんて、天が許しても俺が許さん」

「へへへ、俺達がゆるしてんだよ。色男さんよお」

助けに向かった勇次の前に、対峙していたチンピラ達が道をふさいだ。

「どけえい。お前ら不細工が、この色男の道をふさぐことは、尚更許せん」

勇次の雄叫びと同時に、チンピラ共は勇次に襲いかかった。

それは映画のアクションシーンを映し出したかのようだった。

勇次はチンピラのパンチをひらりと避けたと同時に相手の背中を押

し、もう一人のチンピラの足を引っかけた。チンピラ達は重なり合
って倒れ込んだ瞬間に、勇次は由美子の方へ向かった。

「由美子ちゃん。白馬の王子様のお越しだよ」と

減らず口を叩きながら、由美子を掴んでいた男に飛び蹴りを喰ら
わし、着地と同時にもう一人を殴りつけた。

「ゆ、勇次君！あなたは…」

「はははは！世紀の大怪盗勇次君ただいま参上」

先ほどまでは白馬の王子様が、軽薄な大怪盗になって由美子の腕
を掴んで走り出した。

商店街を走り抜けたき、息を切らした由美子が立ち止まった。

「待つて、そんなに…走れない…」

「あ、ごめん。なんかしつこそうな奴等だったから…顔からして
もしつこそうだったもんな」

「勇次君…あなたは一体…」

先ほどの喧嘩慣れは、普通じゃないと感じた由美子は、勇次に問
いだった。

「あ、白馬の王子様の方にしてくれる？大怪盗より由美子ちゃ
んには白馬の王子様の方が…」

「まじめに答えて！」

茶化す勇次に、由美子は必死になった。

「あんな、やくざよ？さっきのは…喧嘩のプロよ？それを…あな
たは一体何者なの？」

「勇次君だよ」

不思議がる由美子に笑顔を見せて答えた。

「だから、白馬の王子様はお姫さまを助けるためには、何だって
出来ちゃうんだよ」

勇次が言い切ると共に現れたのは、しつこい顔の高知組のチンピ
ラ共だった。

「ほんとに、ひつこいな。白馬の王子様は無敵なんかい。仕方が
ない。召使いの所に逃げるか」

信じられないと言い切る由美子の腕を掴み、再び勇次は走り出した。

追いかけてくを楽しむかのように、勇次は由美子連れて逃げる。その逃げる先に見えた看板は…いかがわしい雰囲気漂う「高級ゲーボーイクラブ『ドール』」だった。

「はーるかちゃん」

「勇ちゃん！」

なよなよした男の子たちが開店の準備にかかっている場面に、由美子連れれた勇次が走り込んできた。

「ちよつと助けて！俺達追われてるんだ！白馬の王子様もさすがに疲れちゃって…」

「きゃー誰？このかつこいいお兄さん、はるかの知り合い？」

勇次の回りに、なよなよした綺麗な男の子たちが群がる。それを嫌がっているのか、照れているのか、または喜んでいるのか解らない対応で勇次は答えていた。

「これじゃあ、仕事の邪魔だな」

由美子と勇次の後ろから、低い響きの良い声が聞こえた。

「すみません…すみません…私達追われてて…」

謝りながら振り返る由美子の瞳に映ったのは、彫刻のように整った勝の姿だった。

「いいえ、お嬢さんの事を言っているではありませんよ。この軽薄そうな男が邪魔だ！と言ってるのです。美しい女性なら、一向に構いません」

「勝さん！ラッキー！あんたがいてくれて助かったよ」

ハードボイルドの美女は付き物。勇次なんかにはもったいないほどの美女じゃないか！

勇次が話しかけるのも聞かず、勝は由美子に話しかけた。

「何かお困りですか？」

「あ、あの…」

勝ほどの甘い声と、逞しい体、そして深い瞳で見つめられて、頬

の紅潮しない女性はいないだろう。

「勝さん！」

「勝ちゃん！」

あんな阿呆共はほっとけ！俺はクールなハードボイルドを生
き抜いてやるんだ！あれ？この娘：

「どこかで…会ったことありませんか？」

勝は女を口説くような台詞を並べた。しかし、それは口説く為で
はなかったが、外野は口説いてるようにしか見えなかった。

「勝ちゃん！そんな女、ほっときなさいよ！」

「勝さん！それは俺のお姫さまなんだよ！」

外野がうるさい中、勝は由美子に事情と彼女の事を聞き出そうと
するが、余りにも回りがうるさすぎた。

それは、はるかと勇次の妨害だけでは無くなったからだった。

「やっと見つけたぜ、色男の兄ちゃんよう！女は渡してもらっぜ
！」

先ほどのチンピラ共が店内に乗り込んできたのだった。

「あーしつこいな！あれは俺が口説いてる女なの！」

「そうよ！勇ちゃんが早く口説かないから、勝ちゃんがあんな女
を相手にするんじゃない！」

「はるかちゃんもそう思うだろ？だからさ、勝さんをはるかちゃ
ん、俺は由美子ちゃんね、頼むよ」

「解ったわ！」

「ちよーつとまっただれや、綺麗な兄ちゃん達よお」

のけ者にされたことに、ようやく気付いたチンピラ共の怒りの声
と、鉄拳が振り込まれた。もちろん勇次とはるかが、それを喰らう
はずもない。男の鉄拳は空を切り、不運なことに勝と由美子の間に
転げた。それは、この場所でチンピラが転げるに最悪の場所だった。

「何だ、お前は…」

勝の冷徹な一睨みがチンピラを凍らせた。

「何なんだ！お前たちはさっきから！勇次！はるか！少しは静か

にしる！何だ。お前等は」

最後のお前等とは、高知組のチンピラ達だった。

「もしかして、…あなたは…山崎…さんでは…」

「そうだ、それがどうしたチンピラ」

勝の容赦ない言いように、チンピラ達はびくついた。

「勝さん、チンピラにそのままチンピラって呼んじゃあ…可哀想
と言うもの…」

「勇次は黙っている」

由美子を後ろに回しながら、勝はチンピラ達の前に立ちはだかつた。

「俺を知っているなら話が早いな。さあ、去ね」

チンピラ共は顔を合わせて、雲の上の人に言い返した。

「あの、お言葉ですが…山崎さん。その女は…」

「女あ」

自分の庇っている女を『女』呼ばわりされた勝が口を挟んだ。

「いえ、その、その女性、高野組組長の娘さんでして…その、
高知組長からさらってこいと…」

勝は呆れた顔をした。

なんだってこんな馬鹿ばかり揃ってるんだ。新法でやくざが
弱くなったとは…本当の事だったんだなあ…

「高知組は一度失敗した。その名誉挽回と言う訳か…馬鹿者！そ
れなら人質なんか取らずに、力で見せつけてやれ！関係ない娘さん
に手を付けるようなせこい真似すんじゃない」

「はっはい…組長にそう伝えます…お許し下さい…ごめん下さい
…あの、ご容赦下さい」

「わかった、わかったから早く行けよ」

勝は少々疲れた吐息と共に声を発した。

もちろんチンピラ達は蜘蛛の子を散らすように店から出ていった。

「さすが勝ちゃん！かっこいい！私の職場を守ってくれたのね！」
「違う」

はるかと言葉を否定して、後ろにかくまっていた由美子に振り返った。

「怪我はありませんでしたか？」

優しい問いかけに由美子は頬を赤らめた。

それは勝が格好良すぎる為だけではなかった。由美子にとって初恋の人、山崎勝だったからだ。

「ないない！怪我なんかない！俺が守ってきたもんねー、由美子ちゃん」

勇次が急いで二人の間に割って入った。

「勇次…お前に聞いてないんだよ」

「勝さん…人の女に手を出すほど飢えてたの？はるかちゃんがいるからねー勝さんには」

勝と勇次の女の取り合いが始まったと思ったが、由美子が一言…その間に入った。

「え…はるかさんって方と…？」

「いいえ、違いますよ。由美子さん。はるかというのは私がボディーガードを頼まれてしている、赤の他人です」

「まあ勝ちゃん！赤の他人だから恋が出来るのよ？」

「お前と恋をした覚えはない」

「早く恋に落ちてよ…由美子ちゃんは僕のだから！」

三人の光景に由美子はおかしくなって、吹き出してしまった。

余りにも勝の変わりようと、漫才のような三人に心から笑ってしまった。

「なに笑ってんのよ。さっさと出てってよ」

はるかがぶつきらばうに由美子に言うと、真っ先に行動したのは勝だった。

「そうだな、では行きましょうか由美子さん」

「違うー」

勇次とはるかは一斉に声を上げて二人を止めた。

「由美子ちゃんは追われてるんだよ？今、危険だしさ」

「なんでえ、なんでこんな女の肩だいてんのよ、勝ちゃん」

「ああ！まだ俺も抱いてない肩を！勝さん酷いや」

「ああ、うるさい！もう、座れ！」

「はるかねー勝ちゃんの横！絶対横！」

座るにも一騒動が起きたが、一応はるかの横に勝、勝の前に由美子。そして由美子の隣りに勇次で席順は決まった。

「で、由美子さんは高野組長の娘で、勇次に追いかけて回されて困っている…と言うところですか…」

「違うよ！俺が助けたんだよ。なんたって俺は白馬の王子様なんだから」

「勇ちゃんは、ただの泥棒でしょう？」

「やつぱり、本当に泥棒だったんですね…」

由美子の一言で場は静まり返った。

「ねえ、もしかして勇ちゃん…」

「勇次…お前、泥棒って言ったのか…」

信じられない！といった二人に由美子が弁解した。

「いえ、勇次君は、きつと私を楽しませてくれるために…」

「いいんです由美子さん、こんな軽薄馬鹿を庇わなくて」

勝が由美子に優しく言つて、勇次の話は無くなった。

「しかしあの連中、もう由美子ちゃんを狙うことはないだろうか

…」

「いや、高知組は名誉挽回のために、ひつこく追い回すかも知れないな。もしかして、家の近くで張ってるかも知れない。由美子さん、お父さんに頼んで迎えに来て貰つてはいかがですか？」

勝の提案に由美子は激しく首を振った。

「あんな父に助けられたくありません。妾を何人も作り、母を苦しめ、私を孤独に追いやった父など…あんな父なんか…守られたくありません」

「何だかんだ言つても、親の世話になつてんでしょ！」

ぶっきらぼうによそ見しながら言つたはるかの言葉に、由美子は

首を横に振った。

「なによ、あんた一人で暮らしてるの？」

はるかが初めて由美子の方を見て語りかけた。

「ええ、高校の頃からバイトをして…一人で暮らしています」

「偉いね、由美子ちゃん。ほんとに偉いね」

勇次がひどく感動して、今にも涙を流しそうなのに比べ、勝はじつと由美子を見ていた。

「いいわよ。じゃ、私の家に来なさいよ」

「はるか…」

勝ははるかの言葉が信じられなかった。

「はるかさん…でも…」

「仕方ないでしょ！勇ちゃんは今にも俺んちに泊まれって言いつうだし、勝ちやんだってそうなれば黙ってはいないだろうし…言っとくけど、あんたの為じゃなくて、勝ちちゃんがあんたを泊めるなんて言い出さない為よ！調子に乗らないでね」

はるかのぶつきらばうな言い方が、余りにもワザとらしかったが、あえて口にする者はいなかった。

「さあ、もう今日は仕事にもなんないから、帰りましょう。勝ちやん」

高知組が乱入してきて、開店の準備はそのままになっていた。散らかった室内を片づけて、他のゲーボーイ達は帰っている。

四人は席を立ちドアの方へ進み、店を出た。はるかが店の鍵を預かっており、鍵を閉めようとした瞬間の出来事だった。

「大人しくしろ！」

どこから見ても、やくざだった。

「くそ、しつこい奴等だ。言ってもわからんようだな。逃げるぞ勇次」

「がってんだ！由美子さん早く、店の裏側から出よう」

由美子を先に店内に入れ、勇次が続く。

「行くぞはるか」

勝がドアをくぐろうとした瞬間だった。

「あーん。鍵が取れない…やつ、なにすんのよ。スケベ！離してよ…」

「はるか？」

ドアが閉まり、鍵がガチャという音をたてた。

「なんだ…なんなんだ！」

さっきの連中は…もしかして高野組の…はるかを…はるかを狙っていたのか！

「勇次さん！退いて！俺が開けるよ」

勇次が勝を払ってドアノブにしがみついた。

「勇次…外からしか開かないんだ。内側には鍵穴さえない」

「早く追いかけましょう。山崎さん、勇次君！裏口から…」

「もう、車で行ってしまったださ」

なんて事だ…俺がドジを踏むなんて…。

はるかを高野組に奪われた勝が来る場所は、先程はるかと共に訪れた平山組本部の事務所である。表玄関から暗い表情で入ってくる勝の姿は、事務所に待機している組員にとって恐怖の何ものでもなかった。組員達は、深々と頭を下げ挨拶するが、勝は眉一つ動かすことなく通り過ぎていった。

そして、勝が深々と頭を下げる相手はこの世で唯一人、北原元蔵である。静かな室内が緊張する空気を表すように、二人を取り巻いていた。

「勝」

普段から重圧のある低い声が、更に低くなり勝を呼んだ。

北原は硬い表情のまま、怒るわけでもなく話しかけた。

「お前ほどの男がどうしたというのだ」

「申し訳ありません。全て私のミスです」

下げた頭を上げることなく、はつきりした口調で勝は謝罪した。

「儂は理由を聞いているのだぞ？」

「何を言っても言い訳にしかありません」

勝に言えるはずがない。

敵対関係にある高野の娘に気を取られていて、はるか奪われたなど口が裂けても言えなかった。

「儂はお前を可愛がっている。それは解るな？」

「はい、もちろんです」

「では、儂を失望させないでくれ。お前は自分のミスを自分で補うことの出来る男だ。そうだろう」

北原は厳しい瞳で、勝を見つめていた。

下げていた頭を起こし、勝は北原の瞳を見つめ返した。それは、日本の暴力団組織の頂点に立つ男、自分の魂を動かす男の瞳だった。普段は穏やかな振りをしているが、やはり唯の凡人には何万とい

う組員はついて行かない。

その組長が、勝にもう一度チャンスをくれたのだ。自分を信頼してくれているのだ。はるかを奪われたという事は平山組の、いや、組長の顔に泥を塗ったと同じ事。なんと情けないことをしてしまったのか…。

勝は北原の信頼を裏切ってしまった事を後悔していた。自分のミスを恥じるより、北原に対しての懺悔の気持ちが大きかった。

次は、決して失敗は許されない。

「はい。はるかが無事に救い出し、この抗争に決着をつけます。組長の信頼を裏切るような不様な真似は決して致しません」

「うむ。欲しい武器があれば持つていくがいい」

北原の言葉を聞き、深く一礼して勝は事務所を出た。

お気に入りのベンツに乗り込み、勝はアクセルを踏んだ。しかし、いつものように軽快な気分にはなれない。不満げに勝は運転していた。

「勝さん…」

後ろのシートから勇次が身を乗り出して勝の名を呼んだが、反応は無かった。

そしてもう一人、後ろのシートにいた由美子が嘆いた。

「ごめんなさい…私のせいで…なんて謝ったらいいか…本当にごめんなさい」

勝は、二人が乗っていることを忘れていた。由美子の声で、やつと二人の存在を思い出した始末である。それ程、勝の不機嫌、落ち込み加減は深かった。

「いやっ、俺のミスです。由美子さんが気にすることはない。親父さんも名誉挽回の機会を与えてくれた事だし…本当に、あなたが気にすることはないのです」

勝は自分を責めるような口振りで、重く語っていた。

豪華な車内には、小さなエンジン音が聞こえる程度の静けさが漂っていた。

「ほら！何も暗くなることはないって！俺が忍び込んで、はるかちゃんを助けてあげたらいいし！」

沈黙が耐えきれないのか、勇次が陽気に口を開いた。だが、それは勝の一喝で見事に粉碎するのである。

「馬鹿者！高野邸は今や緊急事態体制に入っているだろうから、そんな簡単に忍び込めるか！それに、高野組を何とかしなければ、またはるかが狙われるだけだ……」

「山崎さん……はるかさんのこと、好きなんですね……」

ぼつりと呟いた由美子の言葉に、勝は一瞬言葉を失った。

「……違います！違う……違うんだ！」

声が大きくなるにつれ、由美子の言葉を肯定しているようで、勝はいっしょに黙り込んだ。

違う、俺のミスだからだ。俺の汚点を消すためにはるかを手けるんだ……。組長のために……どうしたら信じてくれるだろう……。

由美子に妙な誤解を植え付けながら、車は神戸の繁華街にある勝の部屋に向かっていった。

「さて、どうするかが問題なんだよな」

四〇畳ほどの広い室内の柔らかなソファの上に、何気なく座っている勇次が呟いた。

「おい、勇次。誰がお前をこの部屋に入れていいと言った？」

黒を基調とした室内には塵一つ無く、勝の几帳面な性格を表していた。

その整った室内に似つかわしくない茶色い髪と軽薄な声が勝には許せなかった。

「勇次。誰の許しを得たんだ！」

「まあまあ、勝さんと俺の仲じゃない」

「どんな仲なんだ！お前とは赤の他人だ！」

「そんなことを言ってる場合じゃないのでは……無いのでしょうか……」

由美子の仲裁で勝は冷静さを取り戻すが、やはり勇次が部屋に存在することは許せなかった。

「私はこんなこそ泥に力を借りなくても、はるかを助け出せます」
由美子にそう告げると、勇次を玄関から放り出し、冷たくドアを閉め由美子の隣りに腰を下ろした。

「山崎さんは、高野組を解散：または壊滅させなくてはならないのでしょうか？」

勝は無言のまま頷いた。

「私にいい考えがあります」

強い意志を秘めた瞳が勝に向けられた。

二人きりの空間に緊張した空気が流れ、由美子は話しだした。

「私は父が憎いのです。母を苦しめた父が、私を孤独にした父が…。今から私は恐ろしいことを言います…。それは、余りにも父を憎み、軽蔑しているからです」

一呼吸おき、黙って聞いている勝に続けて話し始めた。

「病床の母を置き去りにして、幹部会や商売女：愛人の所へ行つて…私と母を暗闇に残して…。私から恋人も友達も…全てを奪っていった。やくざの娘なんかにした…あんな人なんて…。私がどうなっても、もう悲しむ人もいない…。母の葬儀の時だって、抗争中だからって…。私が…私が、高野組を…父である高野真治を…」

「何を言おうとしているんだ！由美子さん？あなたは何を言おうとしているか解っているのか？」

勝は由美子の細い肩を揺さぶった。

「だって、だって、私は…あの人が憎い…そして…そして…」

由美子の強かった瞳から、不安が溢れるように、透明な涙の滴が流れた。

白い肌を透かし流れる涙が美しかった。痛ましい姿が綺麗だった。勝はこれほど涙の似合う女性に出会ったことはない。

由美子が余りにも儂く、か細く、悲しげだった。

由美子は取り残された暗闇の中で、父親を待っていたのだ。心細

い時の中で、支えてくれるはずの父を…暖かな時を待っていたのだ。しかし、彼女の待っていた父は、前組長が逝去した下克上の世界を渡っていたのだ。

由美子は支えてもらえないまま、震えながら寂しい時を過ごしていたから、儚く見える事を勝は理解した。

だから勝は、由美子を暖めたくて抱き寄せた。

「あなたは自分の心を見失っている。それは、余りにも悲しすぎる…」

あなたは…父を憎いと言いながら…父親の愛情を欲している。自分が死んでも誰も悲しまないと、全ての人を拒絶しながらも、父親だけは…父親だけを欲している。きっと父親の愛を欲している。それが叶えられなかった分、憎しみへと姿を変えたのだ。

「あなたに、そんなことはさせられない…」

勝は自分の胸の中で、小さく泣く由美子に優しく言った。

「でも、でもはるかさんが捕まってしまったのも、半分以上は私のせいです。私は…私はあなたの役に立ちたい…」

由美子の言葉は勝の言葉を奪うのには十分だった。

「由美子さん…」

「お願い…」

涙の訴えに、勝は由美子の希望に答えた。

「爆弾を仕掛けます。それで、運悪く高野を殺してしまうかもしれませんが。それで…いいですか？」

「ええ、私に仕掛けさせて下さい。そうでないと私の気が済みません」

二人の落ちついた雰囲気部屋を包む中、窓の外ではにぎやかな何かが揺れていた。

「まったく！ひどいや！勝さん。由美子ちゃんと二人っきりで二〇分間も過ごすなんて…」

妖しい雰囲気勝と由美子の間に流れたとき、一五階の窓から侵

入しようとした勇次が現れて、由美子が勇次を部屋へ受け入れた。

「なんだ！お前こそ人の部屋に…なんて所から現れるんだ！ここにはベランダなんて無いビルなんだぞ？それを…窓からなんて…」

深い溜息を一つ吐いて勝は話題を変えた。

「今回…はるかを救出するにあたり…お前の…その、勇次の力を…ほんの少し借りようと思う…」

言いくい言葉を、勝は必死に述べた。

「最初っから素直に言ってくればいいのになぁ」

「最初はお前がいなくても出来るはずだったんだ！俺が一人で侵入してだなぁ…」

「ごめんなさい…私のせいで…山崎さんが私のわがままを聞いて下さったから…」

由美子の言葉で、勝は自分が大人げない態度を取ったことに気付いた。

「まあ、そんなことはどうでもいい。勇次は由美子さんの友達…と言うことで、高野邸に入ってはるかを救出。由美子さんは時限爆弾を設置して下さい」

「えー、今の状況で友達なんて通用するの？…あ！ねえねえ、俺が由美子ちゃんの恋人で、結婚する報告に行く！というのはいい作戦だと思っけど！」

「何を言ってるんだ…」

呆れる勝の横で、由美子は勇次の提案に賛成していた。

「いいかも…その方が自然ですよね…。全く帰らなかった娘が、いきなり友達を連れて家に帰るより、結婚の報告の方が…。それに父と喧嘩別れになって部屋に閉じこもってる…って事にすれば動きやすいし…」

「そうだろう！へへん！俺の意見がどれだけ奥が深いか解った？

勝さん！」

「なにか…お前の場合…違う気がするが…」

勝は少し不機嫌に、彼女の意見に賛成した。

「はるかを救出して脱出するときは、屋敷の裏側に逃げてくれ。俺の部下を配置しておく」

「勝さんの部下って…怖い人？」

「いや、顔が知れてない下っ端の奴にしようと思ってるが…」

「なんだ、和夫君かあ」

「…」

簡単に考えが読まれてしまい、勝は少しむくれたが大人として、そしてクールな男として、端正なポーカーフェイスを崩すことはしなかった。

「では、今日の夕刻に…」

勝は自分の部屋の玄関の外で言った。時は既に朝日が昇ろうとしている。

一騒動の後に、勝の部屋で由美子が休み、勝は勇次の部屋に行くことになった。

「なんて…部屋に住んでいるんだ…」

それは、勇次の部屋に入った勝の驚きの声だった。

勇次の部屋は、勝と同じくらい広いはずだが、汚いわけではない。妙なのだ。

絵画、仏像、彫刻が部屋を占領し、壁を覆い隠す本棚には医学書が並び、人体模型などが置いてある。

「俺にこの奇妙な部屋で寝ろというのか？」

「いい部屋でしょ？これだけの美術品に囲まれて寝るなんて、そうそう体験できるものじゃない」

勇次は得意気に言っているが、勝は呆れて言葉も出なかった。

「ねえ、勝さん。由美子ちゃんのこと…どう思ってるの？」

奇妙な部屋の中で、真剣な勇次が果てしなくおかしく見えたが、勝は笑いをこらえた。

「いい子だと思うが？」

「それだけ？」

「何なんだ？…あ、さっきの二〇分間の事を気にしてるのか？た

った二〇分では何もできないぞ」

　　やっぱり、昔のクラスメイト…って事は知らないんだ…知らない方がいいのかなあ？こんな時、はるかちゃんがいてくれたら相談…いやいや楽しむのに…

　　勇次の奇妙な部屋で、奇妙な関係の二人の男は眠った。

閑静な高級住宅街の外れに、他とは比べものにならないほどの屋敷と呼べる建物があった。屋敷の回りにはベントツが数台並び、黒服の男達が見事なまでに配置され、見張っていた。それは高野組組長の私邸である。

「また、ここに戻るなんて…考えてもみなかったわ」

独り言か、誰かに向けて話しているのか判別できないほど、遠い瞳で由美子は呟いた。

夕日が由美子の漆黒の髪を照らし、湿った風が光るそれを揺らした。

「由美子さん…」

勝が心配そうに由美子の名を呼んだ。それは、由美子の姿が余りにも儚く、消えてしまいそうに見えたからかもしれない。

「大丈夫です、山崎さん。覚悟は出来ています」

「大丈夫だよ。俺がついてるし…！安心してよ勝さん！」

「お前だから心配なんだ！たかがコソ泥のくせに、なにか誤解してないか？」

「なに言っただよ勝さん。俺は正義のヒーロー義賊の勇次君なんだよ」

妙な沈黙の時間が流れ、由美子と勇次は高野邸に向かった。

由美子が震える手で、自分の家であった玄関ホーンを押す一方で、勝は自分を慕っている和夫を呼び寄せていた。

小田和夫は二〇歳の若さと一七歳前後の童顔、そして勝への憧れで出来ている高さ一七〇センチの若者だった。

「和夫、悪いな。突然呼び出したりして…」

「いいっす！勝兄貴の為なら、全く苦になりません。命すら惜しくないっす」

敵地である高野邸の近くで、和夫は張り切った声を出した。

「静かにしてくれ。実は頼みがあつて呼んだんだ」

声を潜めて話し出した勝に耳を近づけ、和夫は聞いた。

その内容は、はるかと勇次…そして由美子が今から始める作戦の事だった。

「兄貴…まだ…あんな奴等とつきあつてたんですか…」

「俺だつて好きで付き合つてゐるわけじゃない！」

「じゃあ、はるかさんなんてどうでも良いじゃないですか！」

そうだった…和夫は知らなかったんだ…はるかが親父さんの愛人であることを…。しかし、言えるはずもない。

「いや、可哀想だろ？あいつだつて悪い奴じゃない。そいつが捕まっているんだ」

「何で捕まつたんですか？あんな人が」

言えるかつていうんだ！しかし…言わなければ…比奴は納得しそうもないし…しかし、俺の…いや、親父さんの汚点を話す訳にもいかないし…

「い、いや…俺が…その、そう！高野組の奴等が馬鹿で…はるかが俺の恋人か何かと勘違いして…それで俺が抗争に乗り込んでくると思つたらしくて…それで…はるかを人質に取られて…」

しどろもどろ答える勝を疑わしい目で見ていた和夫が、諦めた表情を見せた。

「解りましたよ…。何だかんだ言つても、はるかさん達が好きなんだから…兄貴は…」

「違う！今回は俺の責任もあるからであつて、決して好きとか嫌いとか関係ない。あ、俺の言うことを信じて無いな！」

「兄貴…兄貴はクールなハードボイルドで僕の憧れなんです。そんなに焦つた兄貴は…」

「焦つてなんか無いぞ、俺は…何を勘違いしているんだ！俺はだなあ…」

と、言い訳するほど嘘っぽく聞こえてしまう事が悲しくなった勝は、疲れを感じて諦めた。

「まあ、そんなことはどうでも良いことなんだ。まずは、はるかを救出して高野組を壊滅させる。その為に和夫にやって貰いたいことがあるんだ」

落ちつきを取り戻した勝は、和夫に作戦を詳しく話した。

「解りました。助け出したはるかさんと勇次さん、そして由美子さんを車で運べば良いんですね」

「そうだ。俺は顔が知られているからな。近くまで行けないんだ。心配だから、このトランシーバーをもって行け」

「はい。では行つて来ます」

和夫を見送った勝は、高野邸が見える公園に向かった。高台にある公園からは、美しい神戸の姿が赤く染まっていた。

時はすでに夕刻であった。

「私です。由美子です」

少し震える声で由美子はインターホンに向けて自分の名を名乗った。

「え。お嬢さんですか！早く！早く入って下さい。どこに居られたんですか。捜してたんです」

慌てる組員の応答に由美子は落ちついた様子で家に入った。

爆弾は勇次が抱えている紙袋に入っている。

「平山組の連中が行きませんでしたか？いや、ご無事で何よりです」

玄関に入るやいな、上品そうだが暴力団組員とわかる男が由美子の前に現れた。

「あの人は？」

「親父さんですか？今、出かけておりました…」

「ふん、どうせどこかの女の所にも行ってるんでしょう？」

口ごもる組員をよそに、由美子は自分の部屋がある筈の二階に上がろうとしたとき、勇次の肩を掴まれた。

「なんや、お前はあ。ここをどこやと思ってんねん」

もう一人の人相の悪い男が現れた。

その男から庇うように由美子が前に出た。

「その人は私の彼氏や！結婚しようと思ってる人や…」

「お嬢さん！」

「はいはい、人の恋路を邪魔する奴は、馬に蹴られて死んじまえて言うだろ？さあ由美子ちゃん。いざ行かん！我らの愛のお部屋に！」

「勇次君…」

肩を抱いて階段を上がる勇次に、由美子は赤面しながら部屋に向かった。

「あの人が帰ってきたら、私に伝えて！」

呆然とする組員に言って、由美子と勇次は部屋に入った。

そこはまだ由美子が出ていった時のままだった。

「全然変わってないわ…」

「由美子ちゃんたら、可愛い部屋に住んでたんだね。今度は邪魔の入らない由美子ちゃんの自宅に呼んで欲しいもんだ」

緊張した表情に笑顔が戻り、優しい声で由美子は話し始めた。

「いろいろごめんなさい…勇次君を巻き込んだじゃって…。なんてお礼を言ったらいいか…。勇次君のおかげで山崎君にも会えたし…私…嬉しくて…。こんな時なのに、嬉しくて…」

涙が頬を伝う。白い肌に黒い髪が幾筋が落ち、神秘的までに美しく勇次に見えた。その為だろうか、由美子の心を奪うために、こんな危険なことを引き受けたのを一瞬忘れさせた。

「なんで勝さんにクラスメートだった事を言わなかったの？」

「言えないわ…はるかさんという人もいる様だし…」

「はるかちゃんは…また違うと思うな…。勝さんにとって恋愛って感じじゃないと思う」

「そうね…彼にとって、あなたとはるかさんは特別なのよね…それに、はるかさんの事だけじゃなくて…こんな状況で…言えるはずもないし…」

俯く由美子のうなじの白さが、余りにも儚くて、勇次は由美子の肩を掴んだ。

「勝さんはそんなこと気にする人じゃないよ」

「そうね…私を助けようとして…はるかさんを誘拐されたんだもの…。違うの…きつと私…怖いんだよ…。山崎君の思い出だけで生きてきたから…その人に拒絶されるのが…怖い。こうやって山崎君の役に立てるだけで、結構幸せなんだ」

「由美子ちゃん程綺麗な人が何言ってるんだよ。もっと幸せになっ
ていいんだ」

勇次は口説いていたのを忘れていた。それ程由美子が可哀想に見えたし、同情もした。

「ありがとう。勇次君」

勇次の胸の中で、小さく震えながら泣いた。人の胸の中で泣くと言うことが、これほど心地よいことを、由美子は忘れていた。由美子は勇次の暖かい腕にずっと抱かれていたなら…と考えたが、由美子には大切な役目があったのだ。自分のせいで人質に取られたはるかを救出しなければならない。

「勇次君…ごめんね…。もう大丈夫だから。さあ、行つて！」

勇次の胸を押して、由美子は心地よい場所から離れた。

「気をつけてね。はるかさんは離れの倉庫にいると思う。爆弾は私を取り付けるから…あの人のいそうな場所へ…。取り付けたら屋敷の裏に向かうわ。…もし、もしも私が屋敷の裏に来なかつたら先に逃げて…」

「由美子ちゃん…いいのかい？本当に…。君のお父さんなんだよ？…それに…」

「それに人殺しね…」

やりきれないといった表情を見せて、由美子は勇次を部屋から出した。

いいのよ…あんな人…母さんを不幸にした男なんて…死んでしまえばいいのよ…

「もう、痛い！こんな縄しなくったっていいでしょ！」

はるかの高き声が倉庫の中から聞こえる。

「うるさい！少しは黙ったらどうだ！」

「ふん、綺麗な私の声が聞けるだけでも感謝して欲しいもんだわさ」

「おかまのくせに…」

「あんた、今私のことをおかまって言った？ふうん？私に魅力を感じないの？不感症なんじゃない？」

妙に色っぽい声をだしてはるかが挑発した。

「少しは黙ってる！いや、黙らしてやろうか…」

「あんたたち！三人しかいないじゃない！私を愛する勝ちちゃんが来たら、ぎったんぎったんにやつつけられちゃうんだから！離さないよ！スケベ！」

倉庫の外で聞いていた勇次は笑いをこらえるのに必死だったが、そろそろ助けなければ…と思い、倉庫の前に立つ見張りを難なく片づけて扉を開いた。

「ジャジャジャー！姫を助ける正義のヒーロー勇ちゃん登場！」

呆気にとられた三人の内、扉付近にいた男を蹴りつけ、その男の上に乗って勇次が現れた。

「なんでえ。なんで勇ちゃんのお？」

不平を言うはるかは、上に乗りがかかっていた男の股間を思いっきり膝で蹴った。

「せつかく助けに来てあげたのにい」

股間を抑え苦しむ男を、勇次のパンチでとどめを刺し、もう一人の男に飛びかかった。

「私を愛する勝ちちゃんは？」

「えー？」

取っ組み合いをしている勇次に答える暇はなかった。勇次が取っ組み合いをしている最中に、はるかは自分を縛るロープを外しにか

かっていた。

「もう、勝ちゃんに縛られるんらしいけど…こんな不細工達じゃ…」

ロープを外して、靴の底から小さな細身のナイフを五本取り出した。

「こんな不細工達はごめんだわ！」

そう言いながら投げたナイフは、勇次の端正な顔の横を通り、不細工な男の肩に刺さった。

「もう、はるかちゃんったら怖いじゃん！」

男が怯んだ隙に、勇次の炸裂パンチが決まった。

「ねえ、勝ちゃんは！」

「勝さんは顔が知られてるから、こんな所まで来れないよ」

「愛の力があれば来れるはず！なのになあ」

「そうだねえ、由美子ちゃんを俺の愛の力で…」

「なんか勇ちゃん暗いね…」

「そうなの…落ち込んでるんだから…ちょっとは優しくして、はるかちゃん…」

はるかに泣きつこうとしたが、すでにはるかは勇次の数歩前にいた。

「さあ！勝ちゃんが浮気しないように、早くかえんなくちゃ！案内して勇ちゃん！…勇ちゃん？」

はるかは立ち止まっている勇次の腕を引っ張って歩かせようとした。

「なんか…今回…俺って…最悪…」

「何？何か言った？」

「しつ。ここから見張りが厳しくなるから…。こっち、こっち」庭の茂みに隠れながら、勇次は由美子の様子に気がなった。

「なあ、はるかちゃん。寄り道していかないか？」

「楽しいところならいいけど？」

こんな状況で楽しい寄り道なんてあるのだろうか…。

「楽しいと思うよ！」

「うそつき……」

聞こえないようにはるかには呟いたが、勇次の後をついていった。

暗闇が支配する時刻。時はすでに八時を回っていた。勇次と由美子が高野邸に来て、二時間が経過していた。

「由美子を呼べ！」

静かに行動していた勇次と、救出されたはるかが、身近に感じるほどの大声を張り上げた人物がいた。それは居間にいた高野組長、由美子の父親だった。

勇次達は息を潜めて、居間の前にある茂みに身を隠した。

勇次とはるかが壁に耳をあてる。

「由美子！今までどこにいたんや」

「……」

「まあ、由美子が帰ってきてくれたんならええ。でもな、どの馬の骨かもわからん男を連れ帰ったそうやないか」

「……帰ってきたのではありません。報告にあがっただけです」

冷たい由美子の言葉に、勇次はぞつとした。

あれが怯えていた、悲しんでいた彼女の声なのか？

「由美子！その男はどこにいる！呼んでこい」

「……」

由美子の男であるはずの勇次が、横で壁に耳を当てているのだから、由美子に呼べるはずがない。

しかし、男は現れた。

「ジャジャジャーン！由美子ちゃんの恋人！勇次君登場！」

「勇次君！」

いきなり窓を割って入る勇次の姿に、由美子は驚き、はるかは茂みの中で溜息を洩らした。

「まったく、好きなんだから……」

はるかの呟きを余所に、勇次は無遠慮に高野に向かった。

「お嬢さんをいただきます。用事はそれだけです。さあ、由美子ちゃん、行こう」

呆然とする高野に一礼した勇次は、端正な顔を引き締めて由美子の手を取った。

「さあ、行こう」

由美子は勇次の向かう方に、釣られるように付いていった。

窓から来た勇次は、由美子を抱き上げて、再び窓から外へ出た。

「待て！いや、待ってくれ！由美子！父さんを許してくれ。帰ってきてくれ。由美子お」

必死に頼む父親に、顔色一つ変えないで由美子は勇次に抱き上げられていた。

「由美子お」

なりふり構わず娘の名を呼び続ける声に、他の声が入り込んだ。

「親父さん！平山の愛人が逃げました！」

「うるさい！今はそれどころじゃないんだ！」

「父さん……」

組のことより、自分を優先する父に、由美子は少しの躊躇いが生まれた。

「由美子帰ってきてくれ」

勇次と由美子は広い庭の茂みに隠れた。

「由美子ちゃん！爆弾は仕掛けた？」

「ええ、仕掛けたけど……」

「じゃあ、もう帰りましょうよ。こんな所にいても面白くないし」

辺りが騒がしくなってきた頃、三人は茂みの中で、小さくなっていた。

「そろそろ、和夫君も待つてるだろうし……行こうか」

勇次の言葉で三人は動き始めた。

「和夫」

「兄貴、勇次さん達、まだ来ません」

「爆発は九時だ、まだ三〇分ある」

「なんか、中が騒がしくなってきた…あ、見回りが来ました。切ります」

無線機を足下にそのまま落とした和夫に、高野組員が話しかけてきた。

「お前、こんな所に車なんか止めてなにしてんだあ？ああ？子供は帰って早く寝ろや」

和夫の乗る車を蹴られ、和夫は少しびびった。しかし、もう一人の男にドアを開けるように言われ、ここで逃げ出す事もできずドアを開けた。

「おい、坊主。この辺に人が来なかったか」

「いえ、知りません」

「お前、無免許だろ？正直に言わないと警察に言いつけるぞ？ん？」

「ぼ…僕は、無免許なんか…し、してません」

和夫の震える声が、「僕は無免許です！」と言わんばかりに響いた刹那の出来事である。

「かつずおちゃん、おいたしちゃあだめよーん」

はるかの高高い声と、勇次の蹴りが塀から降り注いだため、和夫に話しかけていた男は気を失った。二人目の男を和夫が思いつきり殴った。だが、それはあまり相手には効かなかったようだ。

「和夫君ったら、ホントにやくざかねえ」

無駄口を叩きながら、二人目を片づけると、勇次は由美子に手を差しのべた。

高い塀の向こう側から、由美子が覗いている。その隣にははるかが塀に腰を下ろしていた。

「さあ、勇ちゃんに早く受け取って貰いなさいよ」

はるかが由美子に逃げるように言ったが、由美子は動こうとはしなかった。

「何やってんの？早く登りなさいって」

はるかと言葉を聞くと、由美子は登りかけていた塀を降りた。

「行けない…やっぱり行けないわ…」

由美子のはるかを見上げた。はるかでさえドキリとするほど、月明かりを受けた由美子は美しかった。はるかとは対照的な美しさである。清楚で儂く、そして悲しげだった。美しくても華がなかった。

「あんた…何考えてんの？」

その姿ははるかしか見えなかった。すでに塀の内側に降りていた由美子は、はるかに向かって、小さく言った。

「美人薄命っていうでしょう…」

「な…何戯けたことを言ってるのよ！こんな時に！…あんたなんか長生きするわよ」

はるかの声が微かに震えた。

「あ、あんたなんて、人の恋路を邪魔する野暮な女なんだから…」

「そうね…山崎さんにちよつと優しくされたからって、図に乗っちゃたかな…。はるかさんの様に素敵な方が側にいるのに…ね」

「そうよ！うだうだ言ってるで、早く行くわよ！勇ちゃん…この女ったら…」

はるかが勇次に話しかけた隙に、由美子は歩き出した。

「ちよつと！待ちなさいよ！」

「私…やっぱり、父を殺すなんて…出来ない…。私行きます。爆弾…福山組から調達した武器庫に仕掛けたの。凄い爆発が起きるか…早く行って…」

「待ちなさいったら…」

はるかの呼ぶ声を振り切り、由美子は走り出した。

「勇ちゃん！勇ちゃん！あの女…行っちゃった！」

爆発まで約一五分。由美子は父親を殺すことは出来ないと言って走り去ってしまった。

「何をやってるんだ！あいつ等は一体……」

和夫からは連絡は途絶えたきり……そして刻一刻と時間は進んだ。

勝はあせりを感じ始めていた。自分で計画を立て、自分で実行するなら容易い。しかし、実行するのは、自称義賊と名乗る医学生と、自分の父親を殺しに行く娘なのだ。

上手く行くはずがない……

不安と焦りが勝の心を支配し始めた頃、和夫は途方に暮れていた。

「……勇次さんも、はるかさんも行っちゃった……俺は？俺どうしよう……」

トランシーバーの存在を忘れきった和夫は、塀の外で一人途方に暮れていたのだ。

一方はるかとは、大忙しだった。

「はるかちゃん！なんで走ってんの？」

「だって、あんな風に逃げられちゃあ私が苛めたみたいじゃない……」

由美子を追いかけて広い庭を闇に隠れて走る二人には時間がなかった。

「たぶん居間に向かっていると思う！お父さんを助けるって行ってきたから！」

「もう、爆弾の取り外しとかは、全然間に合わないからな！九時に大爆発だ！」

大声で話しながら勇次とはるか走った。その会話は見張りの組員にも聞こえた。だが、勇次達よりも爆弾のことを報告しなければならぬ。組員達の統率が無くなり始めていた。

「親父さん！危険です！爆弾が仕掛けられているそうです！」

組長のいる居間に向け込んだ組員が見たのは、由美子と高野が向

かい合っている姿だった。

「知っておる！早く逃げろ」

「おやつさん」

「武器庫に仕掛けたそうだ。大爆発するぞ。これで高野組も終わりだ。平山組には戻れるはずもなく、福山組の武器を焼いちまうんだから…逃げろ！」

高野が叫ぶと、組員は走り去った。

「父さん…逃げて…」

由美子の美しい声がかすれていた。

「やっと、やっと由美子が帰ってきたんだ。逃げるときはお前と一緒にだ」

「私は父親を殺そうとしたのよ？生きる資格なんか無いわ！」

「由美子ほど優しい子が…そこまで追いつめたのは…儂だ。すまなかった。母さんのことも…お前のことも…後悔しても遅いかもしれんが、男になりたかったんだ」

高野は床に膝をついた。

それを見守るように由美子は見つめていた。

「何やってんの！あんたたち！」

そこに元気なはるか的一声があがった。

「メロドラマやってんじゃないわよ！あんたは早く死んだって、美人薄命にはならないんだから！行くわよ！」

はるかと勇次が居間につけ込み、由美子の腕を掴んだ。

「父さんを連れて行って…私なんて…」

「馬鹿ね、死ぬなんていつでもできるのよ！今あんたに死なれちゃあ、勝ちゃんに私が苛めたと思われるでしょ！ほら、おじさん！あんたが行かなきゃ、この女びくともしないんだから！」

はるかのその場にあわない甲高い元気な声が、張りつめた空気を和らげた。

「さて、行こう！」

勇次が由美子を抱き抱え、走り出した。

「でも、もう時間が…」

「なに諦めてんの！私には勝ちちゃんが待ってるんだから！」

走りながら喚くはるかの声を、かき消す爆音と破壊音が鳴り響いた。

「勝ちちゃん」

勝のベンツが玄関を突き破り乗り込んできたのだ。

「早く乗れ！」

「さっすが勝さん！美味しいところで出て来るんだから」

ベコベコになったベンツに四人は乗り込み、発進した。

玄関を出た突如、すさまじい爆音が鳴り、炎と煙を一瞬にして吐き出した。

間一髪だった。ベンツだからこそ五人とも助かったようなものだった。それ程の爆発だったのだ。

「高野さん、戦争用の武器：相当持っていましたね」

勝の嫌みに答えるわけでもなく、高野は黙っていた。

「やっぱり愛の力よねえ」

沈黙の合間を縫って入るようにはるかが勝の後ろから手を回して言った。

「違う…あまりにもお前達が頼りにならんし…」

「何だかんだ言っても、勝さんったら俺達のこと心配してくれるんだもんなあ」

「違うと言っているだろう！」

三人のやりとりを見て、勝の隣で由美子は笑った。

「ゴホン！…で、高野さん、由美子さんこれからどうします？」

車を走らすエンジン音だけが、車の中にあっただ。

「もう、高野組は壊滅でしょう…そして、あなたも無事ではいられない…」

勝の現実のみを語る口調が、余りにも冷たく感じたが、本来殺す相手なのだから仕方がない。

「父さんを見逃してくれるのですか？」

由美子は不安そうに勝に尋ねた。

「勝さんだつて鬼じゃないもん！俺の結婚相手の親父さんを殺すような人じゃないよな」

「誰が結婚相手なんだ！あれは作戦上だけだ！由美子さんに迷惑だろう」

勇次の勝手ないい草に、ついむきになって答えてしまう勝の姿を、高野は驚いていた。

「冷静、冷徹、冷酷、で知られている北原の懐刀のあんたでも…むきになることもあるんやな」

「…」

勝は出来れば見られたく相手に、出来れば見られたくない姿を見せてしまった。

「父さん…山崎さんは、私達の命の恩人なのよ？」

「いや、由美子ちゃんの命の恩人は、この正義のヒーロー勇次君だよ？」

「違うわよ！勇ちゃんに教えてあげた、私のおかげでしょう？」
はるかが出しゃばった所を、勝に小突かれ、誰が誰の恩人かという論議は取りやめとなった。

「山崎君…どうか儂等を見逃してくれんやろうか…。高野組は、さつきあんたが言つた通り壊滅、儂等も家も全て失つた」

「それでどうするんです」

「…」

高野は沈黙した。高野に代わつて答えたのは由美子だった。

「私達、日本を出ます。良いでしょう？お父さん」

「由美子…お前が一緒なら、もう望むことはない。男にはなれんかった今、せめて父親としてお前の側にいさせてくれ」

「じゃ、これにて一件落着ね！」

はるかの妙に元気な声が辺りに響き、暑い夜は静寂の中を駆け抜けて行く。

「あ…」

「どうしたの勝ちちゃん？」

「和夫…和夫を忘れてた…」

暑い夜は、まだ続きそうだった。

5 (後書き)

さて、次はついにエピソードです。

ご意見・ご感想をおまちしています。

エピソード

「ひどいや、兄貴。俺を忘れて逃げるなんてさ」

病室で包帯に巻かれた和夫が愚痴をこぼす。

見舞いに来た勝…もちろん側には、はるか、勇次の姿もあるが、溜息混じりに呟いた。

「いや、悪かった。しかし、お前は車に乗ってたのに…何でまた…」

「兄貴のベンツと違って、俺の乗ってる国産車じゃ、あんな凄惨な爆発に耐えられるわけ無いじゃないっすか。俺一人逃げたら、駄目だっと思って…怖かったけど…待つてたんす」

「馬鹿ねえ。あの騒ぎで、また裏側に戻るわけ無いじゃない。和夫ちゃんもまだまだだね。それに引き替え、私を愛する勝ちゃんは…」

「誰だ？はるかを愛する勝とやらは…物好きがいるものだな」
はるかの言葉に、勝は軽く否定の意味を含めた言葉を吐いた。いつもなら、厳しく怒るのだが、先ほど北原元蔵の所ではるかに助けられていたのだ。

「もう、勝ちゃんったら、照れなくてもいいのに」

「…」

「それはそうと、高野はどうなっただんですか？」

見つけられた時に重傷を負っていた和夫は、二人が外国へ行ったことを知らなかった。全て勝が金と手続きをし、二人は翌日の夕刻にアメリカに発った。向こうでの生活は裕福とまではいかないが、一生平凡に暮らせるだけの金を持たせた。

そんなことは勝にとっては良かったのだ。勝が気になったのは、由美子の最後の言葉だった。

「山崎君…今までありがとう」

あの呼びかけ…懐かしささえ感じる、あの瞳…。勝は気になっていた。

高野親子の事を勇次が説明している間、勝は由美子の事を考えていた。

「勝さん、なにボンヤリしてんの？」

勇次が問いかけたにも関わらず、勝の応答はなかった。

「勝ちちゃん！」

はるかが声と共に、腕に絡み付いてきたところで、やっと我に返った様子で呟いた。

「由美子さんなあ、最後のあの言葉は何だったんだろう…」

その場にいるはるかや勇次に問いかけるように、勝は呟いた。

「あー、さては勝さん由美子ちゃんに惚れたなあ」

勇次の茶化す声で、いつもの勝に戻った。

「違う！いや、なんて言うか」

「いや！勝ちちゃんは私のことだけを覚えてくれなきゃ、はるか泣いちゃう！」

嘘泣きとすぐわかるように、はるかは泣いた。

「あーあー勝さん、こんな可愛い子泣かして、悪いんだなあ」

「勇次！何を言ってるんだ。俺がいつ！どこで！可愛い子を泣かしたんだ！」

勝のむきになる姿を見て、和夫はため息をついた。

「はあ、兄貴。お願いですから、冷静、冷静、冷酷の北原親分の懐刀でいて下さい」

「何言ってるのよ！この方が勝ちちゃんは可愛いんだから！」

はるかが和夫に向かって言い切ったが、和夫も負けてばかりはいられなかった。

「お前たちがいるから！兄貴に女がいないんだよ」

「いいのよーん。こんな美人が側にいるんだから」

はるかは、勝の首に腕を絡ませ体をよせつけた。

「離れるよ！美人ってのは女の事を言うんだから」

「何ですってえ！」

はるかや和夫の争いは終わりが見えなかった。

「勝さん人気者なんだから…あーあ、俺が変わりたかったよ、トホホ…」

勇次が由美子のことを思い浮かべながら嘆いた。

なんで、なんで俺の回りにはこんな奴等ばかりなんだ？おかまが体を寄せてくるわ！馬鹿は包帯まみれだし、拳げ句の果てに、馬鹿に女がいないと心配されて…医学生のコソドロなんぞに嫉妬され…俺はこんな筈じゃなかったんだ！全く！

「いい加減にしろ！」

勝が叫んだ瞬間に、病室のドアから看護婦が現れた。

「何ですか、ここは病院ですよ！」

看護婦に怒られる勝にとって、美女とハードボイルドの世界はまだ遠い様子であった。

END

THE

エピソード（後書き）

勝・遙・勇次の本当の最終話がありますが、まだまだいろんな物語を終えて書こうと思っています。

実は3人にはいろいろな過去と未来がまっています。

ご意見ご感想をいただければ、とても嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0862d/>

ハードボイルドに格好よく

2010年10月10日01時06分発行